

## 小学校 図画工作科 部会

部会長名 川崎町立真崎小学校 校長 小西 良平  
実践者名 川崎町立真崎小学校 教諭 松岡 綾

### 1 研究主題

自ら学びに向かい、自己肯定感を高める授業づくり  
～図画工作科における「問いづくり」と「価値づくり」を重視した授業づくりを通して～

### 2 主題設定の理由

#### (1) 学習指導要領から

人工知能（AI）が飛躍的に進化する現代社会において、感性を働かせたり、目的をもって創造的な問題解決を行ったりすることは、人間にしかできない「人間の強み」である。この「人間の強み」である感性や創造的な問題解決能力の育成において、図画工作科の担う役割は大きい。

学習指導要領では、各教科等で育成すべき資質・能力として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が示されており、これらの資質・能力の育成のため、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善の重要性が述べられている。

「主体的な学び」を実現するためには、子ども自身が興味・関心をもって学習に取り組むことだけでなく、見通しをもって活動したり、学びを振り返ったりすることが重要である。

また、「対話的な学び」を実現するためには、子どもが学びの対象や他者との関わりを通して、自分の考えを創り出したり、広げたりすることが重要となる。

これら一連の学習活動が繰り返されることによって、子どもたちの学びは深い学びとなっていく、3つの資質・能力がバランスよく育成されるような授業改善を目指さなければならないと考える。

#### (2) 学校教育目標から

本校は、「地域を愛し、確かな学力・豊かな心・たくましい心と体を自ら伸ばそうとする児童の育成」という学校教育目標のもと、「地域の人・もの・ことへ感謝できる子」「自他の考えを活かし、愉しく学び合う子」「相手の立場を認め、互いに協力する子」「目標に向かって、最後までやりぬく子」を目指す児童像としている。

本校の子どもたちは明るく素直で、どんなことにも真面目に取り組むことができている。

しかしながら、「自ら学びに向かう力の不足」「基礎学力の向上と活用力」「遅刻等による不登校兆候の増加による学力格差」が課題となっている。また、今年度の重点目標の一つは、「『自ら学びに向かう力』を育成する授業力・学習基盤づくり」である。

校内研究では、算数科の学習における子どもたちの変容を検証しているが、本研究においても「子どもが自ら学びに向かい、自己肯定感を高める授業づくり」を行うことで、学校教育目標の達成を目指すことができると考える。

#### (3) 児童の実態から

本学級の子どもたちは新たなことに出会い、体験することを楽しむことができる子どもたちである。図画工作科の学習では自分の表したいものやことを見つけ、表したいことに合わせて手や体を働かせることができている。

しかしながら、材料や用具を適切に扱うことは苦手としており、絵の具であれば思ったように塗ることができなかつたり、はさみで切りたい形に切ることができなかつたりする実態もある。また、それが原因となり、図工への苦手意識をもってしまっている児童がいる。

児童へのアンケートでも「図工が好きですか」という質問には100%の児童が「図工が好き」だと回答している。しかし、「図工が得意ですか」という質問には50%の児童が「ふつう」と回答しており、理由は「得意なことがほとんどない」「ノコギリとかを使うのが

こわい」「すきだけど上手くつくれない」「失敗してしまうことがあるから」というものがあつた。このことからまずは用具の使い方をしっかり確認、習得させ、「やってみたい」という気持ちをもたせることが必要であると考え。児童が自ら「やってみたい」という意欲をもって活動を行うことで楽しさややりがいを感じ、自己や自分の作品についても肯定することができるであろう。

以上の理由から、本主題を設定した。

### 3 主題の意味

#### (1) 自ら学びに向かい、自己肯定感を高めるとは

自ら学びに向かうとは、子どもが学ぶことに興味や関心をもち、「やってみたい」「解決したい」という問いと活動欲求や課題意識をもって、主体的に取り組む子どもの姿のことである。

自己肯定感を高めるとは、授業の中で「できた」「わかった」と感じ、自信を身につけた子どもの姿のことである。

#### (2) 図画工作科における「問いづくり」と「価値づくり」とは

図画工作科における「問いづくり」とは、子どもが題材に興味を示し、「やってみたい」「作ってみたい」と意欲的に活動に取り組み、楽しもうとする課題提示のことである。

同じく「価値づくり」とは、活動を通して「うまくできた」「楽しかった」と成就感を味わったり、「またしたい」「こんなこともやってみたい」と次の学習への意欲を持たせたりする振り返りのことである。

### 4 研究の目標

図画工作科における「問いづくり」と「価値づくり」を重視した授業づくりを行うことを通して、児童が自ら学びに向かい、自己肯定感を高めることができる授業づくりについて究明する。

### 5 研究仮説

図画工作科の学習指導において、次のような手だてをとれば、児童は自ら学びに向かい、自己肯定感を高めることができるであろう。

- (1) 児童の表現意欲、用具や材料への関心を高めるため、のこぎりを使って自由に板材を切ったり、釘を打ったりする時間やそのための材料、用具を用意する。
- (2) 児童の見方や考え方を広げるため、制作中に鑑賞活動の時間を設けたり、完成作品への感想を書かせたりする。
- (3) 児童が進んで創造しようとする態度を養うため、用具の使い方や効果を指導する。

### 6 研究の計画（授業の計画）

#### (1) 単元（題材等）「ぎこぎこ とんとん」

#### (2) 単元（題材等）の目標及び指導計画

単元	ぎこぎこ とんとん	総時数	7時間	時期	1月
単元の目標	○のこぎりで木を切りながら表したいことを見つけたり、どのように組み合わせるかを想像したりして、どのように表すかを考えることができる。(知識及び技能) ○用具を正しく使い、扱い方に慣れながら、木の切り方や釘の打ち方などを工夫して表すことができる。(思考力、判断力、表現力等) ○のこぎりで切る楽しさやのこぎりで釘を打つ面白さを味わいながら、活動を行うことができる。(学びに向かう力、人間性等)				

次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(援助・支援)
1	1	○金づちを使って打ちたい場所に釘を打つことができる。	○金づちの使い方を知り、釘を打って使い方に慣れる。	○材料・用具の説明を行う。 ○金づちを使う時のきまりを確認する。
	2	○のこぎりを使って木材を切ることができる。	○のこぎりの使い方を知り、実際に木を切ることで使い方に慣れる。	○のこぎりを安全に使うためのきまりを確認する。 ○注意点を確認するための掲示物を用意する。 ○釘を打ったり、切ったりするための練習用の木材を準備して用具の使い心地を確かめさせる。
2	3 4 5 6	○切ったり、釘を打って組み合わせたりしながら、作品をつくる。	○正しく用具を使いながら、作品をつくることができる。	○児童がもったイメージを活用させるため、1次目でもったアイデアを使ってもいいことを伝える。
3	7	○互いの作品を鑑賞しあい、よいところを見つける。	○作品を並べて鑑賞しながら友達の作品の素敵だと思うところ、工夫しているところなどを見つける。	○鑑賞の視点を設定する。 ○作った児童の名前は提示しない。

## 7 指導の実際

教師の働きかけ	児童の反応
<p><b>【第1時・・・用具の使い方の確認・制作】</b> ○教科書の「トントンくぎ打ちコンコンビー玉」を見せ、作るもののイメージを持たせた。</p> <p>○金づちの名称や使い方を説明し、実際にどう使うのか確かめさせ、制作させた。</p> <p>○グループに分かれて制作を行わせ、途中で他のグループの作品を見る時間を取った。</p>	<p>○作例を見て木や釘が使われていることに気付くと作ってみたい、釘を打ってみたいと活動への意欲を高めていた。</p> <p>○児童は最初「指を打ちそうでこわい」と言っていたが、持ち方や打ち方を教え、活動を始めると楽しみながら金づちを使うことができていた。</p> <div data-bbox="794 1451 1372 1836" data-label="Image"> </div> <p><b>【写真1 金づちを使い制作する児童】</b></p> <p>○他のグループの作品を見ることで「あの打ち方面白いね」「もっと釘を打とう」などイメージを広げ、自分たちの作品に活かす姿があった。</p>

○できた作品で実際に遊ぶ時間を設定した。その際に他のグループの作品でも遊ぶように時間で区切り、移動させた。

**【第2時・・・用具の使い方の確認・制作】**

○教科書の「のこぎりザクザク つないでつけて」を見せ、作るもののイメージを持たせた。

○のこぎりの名称や使い方を説明し、実際にどう使うのか手本を見せて確認させ、使わせた。

**【第3～6時・・・制作】**

○のこと金づちの使い方を復習させた。

○制作の際に児童が作りたと思うものを作ることができるために、適宜技法や用具の紹介、指導を行った。

○教科書ではボンドでの接着のみだったが金づちと釘の使い方を習得させるため、児童が自分で選択して使用するよう指導した。

**【第7時・・・鑑賞】**

○児童が自分の成果を感じることができるよう、作品の題名と工夫したところ、頑張ったところを紙に書かせた。

○鑑賞して友だちの作品についての感想をふせんに書かせ、貼らせた。

○面白い工夫を見つけて「すごいね！」と自然と褒める姿があった。

○作例を見て「○○をつくりたい！」と意欲をもつ様子があった。

○正しい使い方をしようと掲示や教科書を見たり、教師や友だちに確認したりする姿があった。



**【写真2 用具の使い方を確認する児童】**

○のこや金づちの持ち方、どの部分を使って打ったり切ったりするかなど確認することができていた。

○「えんぴつたてを作りたい!」「丸い形に切りたい」など、作りたもののイメージから制作する姿や「とりあえず切ってみよう」とのこぎりの切り心地を楽しみながら制作する姿があった。

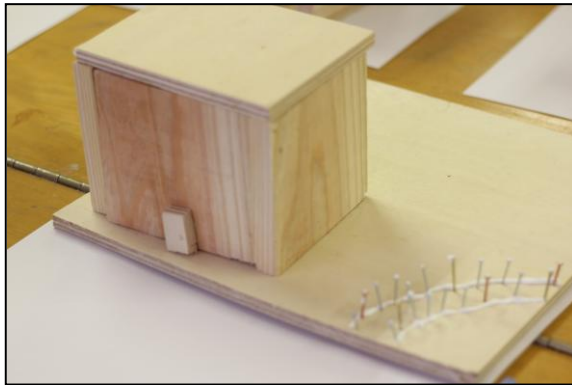


**【写真3 釘やボンドなどで組み合わせる児童】**

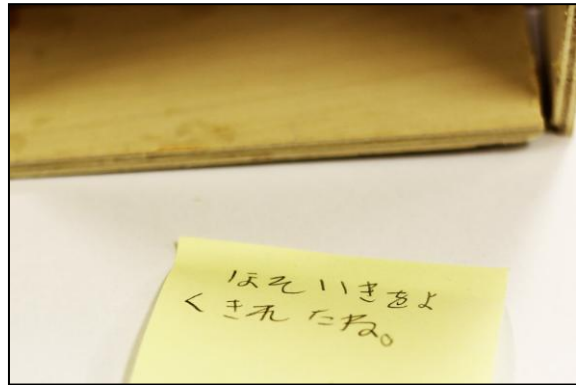
○「ボンドでとめるところを工夫しました」「ハムスターのおうちだからけがをしないようにきれいに釘を打ちました」など自身が工夫して作ったところを振り返ることができていた。

○「人みたいな形になっているね」「足が動いておもしろいね」「ボンドできれいにくっついているね」など見て気付いたことや工夫を読んで気付いたことから友だちの作品への感想を書くことができて

いた。



【写真4 児童の作品】



【写真5 他の児童の作品へのコメント】

## 8 研究のまとめ

これまでの本学級の児童は楽しんでいるが用具の使い方を間違っていたり、「上手くできない」ことへの苦手意識をもってしまい意欲をもてなかつたりする姿があった。

しかし、今回の授業では用具の使い方を何度も確認しながら行ったことや初めて自分だけで使うということから苦手意識よりも「やりたい！」という気持ちを強くもてた様子だった。そして主体的に取り組む中で自分の表したいものを作り上げるために用具を正しく使う必要性を感じ、使い方を習得している姿があった。このことから「こんなものがつくりたい」「つくるためにはどうすればいいんだろうか」という問いをもつことで自ら学びに向かっていくことが分かる。また、作品が出来上がった後自分の作品に題名を付け、工夫やがんばったところを書くことで自分のがんばりや作品のいいところを確認することができていた。また、その後友達への作品へのコメントを考えることで友達の作品の価値、そして自分の作品の価値も深めることができた様子であった。作品への価値を自分、そして友だちの言葉から確認したことで、価値をもち、自己肯定感を高めることができていた。今回、「問いづくり」と「価値づくり」を重視することで自ら学びに向かい、自己肯定感を高める図画工作科の学習活動のあり方を究明するというところで、実践を行ってきた。これからも引き続き児童が図画工作科を楽しみ、自分から関わりたいと思うことができるような授業を研究していきたいと思う。

## 9 成果と今後の課題

(成果)

- 繰り返し用具を使うことで用具の使い方を習得することができた。
- 表したいものを自分で決め、制作することで問いをもって制作を行うことができた。
- 友達の作品を見ることでイメージを広げることができた。
- 自分の作品に題名をつけ、工夫したところやがんばったところを書くことで、自分の作品への価値を深めることができた。
- 友達の作品のいいところを書き合い、読み合うことで価値を深めることができた。

(課題)

● 気を付けていても手を切ってしまうたり、打ってしまったたりした児童がいた。それ自体は悪いことではないが、ケガのリスクを下げるため最初から利き手ではない方に軍手を付けさせるべきであった。

### ◎ 参考文献

- 小学校学習指導要領 図画工作編 文部科学省
- 造形素材にくわしい本 子どもが見つかる創造回路 日本文教出版